式辞

豊田工業高等専門学校校長の山田陽滋です。本校創立六十周年を迎え、式辞を述べる栄誉に預かり大変光栄に存じております。まずもって本日は、ご多用の中、式典にご列席をいただき誠にありがとうございます。教職員をはじめ、関係者一同を代表しまして厚く御礼を申し上げます。ここから、式辞の本題に入ります。少し長くなりますが、豊田高専生の活躍ぶりと私ども教職員の思いをぜひ皆々様に届けさせてください。

式辞の主題としてまず沿革から振り返ります。国立高等専門学校制度の創設は、技術者養成に対する社会の強い要望を背景として昭和三十六年に制定された、いわゆる「高専法案」に基づき、昭和三十七年度から工業高等専門学校の設置は始まりました。豊田高専は翌年、すなわち 1963 年に設置された十二校の一つですので、今年で六十周年になります。発足当初は機械工学、電気工学、建築の三学科で、その後、昭和四十三年、六十二年にそれぞれ土木工学科、情報工学科が増設されました。平成六年には、電子機械工学、建設工学、情報科学の三専攻で構成される専攻科が上位に設置され、さらにその後の一部名称変更を経て現在の学科・専攻科構成に至っています。この専攻科と、昭和五十一年に設立された豊橋・長岡両技術科学大学の創設により、学生の進学先の選択肢が広がりました。また、平成十五年には国立高等専門学校機構法が制定され、いわゆる高専の独立行政法人化が果たされました。

発足当時には、２つの体育館、武道場、弓道場、プールなども相次いで建設されました。その後、歴代の校長、教職員、関連の皆々様のご尽力により、皆様のお手元のパンフレットに掲載されているようなセンターや教育・研究活動拠点が今日まで着々と設置され、学生の活躍の場を広げてきています。また本校は、ピーク時でおよそ六百名の寮生が収容可能な最大規模の寮をもつ高専の一つとしても知られています。コロナ禍に遭ってその数を三百九十名ほどまで減らしましたが、今再び入寮生を増やしています。加えて寮では、創設当初から学生による自主的な寮運営を促し、彼らの社会性を育む「学寮」という位置づけの運営方針を堅持し発展させてきました。

つぎに、教育体制・システムに関しまして、直近の十年間でまず報告すべきは、コロナ禍への対応です。先代の校長、田川智彦先生による陣頭指揮の下、危機管理室会議を合計六十一回重ねる中で、「学びを止めない」を合言葉に教職員が団結して乗り切りました。当時は、学生側の通信環境すら必ずしも整っていませんでしたが、そのような中、そして世間が三密を避けた緊急事態宣言の只中にあって令和二年五月七日に遠隔授業を再開させました。さらにノート PC と超広角カメラ、収音高感度マイク等をラック上にオールインワンでまとめた可搬性に優れる機材を開発し、同年の八月三十一日、実習・実験授業を尊ぶ高専が待ち望むべき対面授業の再開を早々に果たすことができました。

一方、グローバル化の視点で英語科目の教育内容を具体的に説明しますと、本校にユニー

クな取組みである英文多読授業では、例えば二学年生で年間一人当たり十万から十五万語、優れた学生の場合三十万語から成る英文を読みます。また、早くから学生に国際経験を促し、彼らの英語学習に対する動機付けと資質教育に生かしてきました。多い年で、五十人に及ぶ学生が一年間の長期海外留学を経験するほか、国際交流センターが中心となって、国際ビデオコンテストや TEDx と呼ばれる、海外学生とのペアリングによる英語での発表機会を毎年設けています。これらを通して学生にコミュニケーション能力・プレゼン能力を高めてもらうと共に、彼らが主体性・協調性に加え、多様性を尊び、やがてグローバルな感覚をもった市民を志してくれるよう、現在はその土台作りを行っています。

他方、地域貢献観点では、辺境町村に学生が出向き、現地の方々との交流を通じて地域活性の一役を担うドミタウン活動が、先々代校長髙井吉明先生の時代から始まりました。さらに、豊田市、豊田商工会議所との三者連携により、平成二十四年に発足した「とよたイノベーションセンター」が中心となって、本校専攻科生が、学び教えながら周辺企業のＤＸ技術開発に基づく人材育成を支援する「ディジタルXものづくりカレッジ」も令和二年から始まり、実績を積み重ねてきました。

これらのほか、ロボコンに象徴される数々のコンテストにおいても、豊田高専の学生は伝統的に優れた成績を残してきています。ロボカップ大会では、平成二十四年の「世界大会」で第三位、今年も第四位を獲得しました。また今年、NHK 学生ロボコンで全国ベスト４になりました。他のコンテストでも、令和２年に情報危機管理コンテストで文部科学大臣賞、昨年は Deep Learning Contest で企業賞を受賞したほか、Programming Contest においては、豊田高専だけが自由部門・課題部門、競技部門のすべての部門で入賞・特別賞受賞を果たしました。このほか年号こそ省きますが、過去１０年間の高専体育大会の「全国大会」において、陸上 400m リレーで２連覇、ハンドボール部が３度優勝、弓道部も女子団体を中心に優勝３回、個人の水泳競技 400m、800m自由形優勝、などなどを誇ります。

さて、本日も式典にご列席をいただいておりますご来賓の名誉教授高田和之先生ですが、豊田高専の初代校長須賀太郎先生の命を受け、当時同僚の教授とともにある原案を答申されました。これに基づき加筆が行われ、「真理を探究し、開拓の精神をもって日本工業界に寄与し、進んで人類の福祉に貢献する」という、製造業の中心に位置する本校に相応しい「創立の精神」が定められました。これは、今なお多くの機会で引用され、私ども教員の胸にあります。

その一方で、伝統の担い手は、受け継いだものをただ演じるだけでは時代の変化についていけなくなるという現実があります。そこで、伝統の域に身を置きつつ、現代向きに知識や技能をアレンジして過去と現在の相互充足を図る必要があり、そこには多元的な人間力の向上が求められます。創立六十周年を迎えたまさに今年から、本校でもスタートアップ教育も始まりました。これをきっかけとして学生諸君には、これまで述べてきた豊田高専らしい「グローバル化」・「地域連携」をキーワードとして、SDGs 理念のもとで、グローバルな目

標に主体的に取組み、身近な社会課題の発見・解決を図る力を伸ばし、持続可能な社会への貢献を目指してほしい。そして、人間力アップを果たしてほしい。と願いながら、教職員は常に、彼らに新たな活躍・挑戦の場を提供すべく、教育・研究に向けて邁進し自己研鑽を重ねていく所存でおります。

最後に、本校のこれまでの発展にご尽力いただいております国・愛知県・豊田市・各地域の皆様、そして、本校教育後援会、同窓会の皆々様に対しまして、これまでのご厚誼にあらためて御礼を申し上げますとともに、引き続き倍旧のご支援とご鞭撻を賜りますようお願いを申し上げ、校長の式辞といたします。

令和５年１２月１６日　豊田工業高等専門学校校長　山田陽滋